



私が愛したら、あなたは終りよ。

名前の前は何?愛と死、宿命の女カルメンが現代のパリに復活する。ゴダール製作 監督・出演の映画<カルメン>決定版!

# カルメンという名の女

●脚本・脚色 アンヌ・マリー・ニエヴル ●撮影監督 ラウル・ウァル ●録音 フランソワ・ミュージー ●音楽 ルードウィヒ・フォン・ベートーヴェン (弦楽四重奏曲 No.9, No.10, No.14, No.15, No.16) ●演奏 フラット弦楽四重奏団 ●歌 トム・ウェイツ (Ruby's Arms) ●製作代表 アン・サルド ●カラー (フランス映画) 製作 フレミナツ/La Co-PRODUCTION/SARA FILMS/JLG FILMS/ANTENNE 2/©1983 JLG FILMS

ジャン＝リュック・ゴダール監督作品

マルーシュカ・デ・トメルス ● ジャック・ボナフェ ● ミリアム・ルーセル ● クリストフ・オダン ● ジャン＝リュック・ゴダール



1983ヴェネチア国際映画祭グランプリ  
金獅子賞・審査員賞



un film de  
JEAN-LUC GODARD

bow パウ・シリーズ ● フランス映画社提供





# PRÉNOM カルメンとら名の女

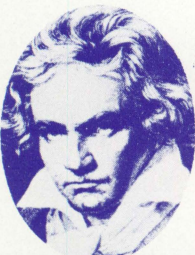
●ジャン＝リュック・ゴダール  
監督作品(フランス映画)

音楽はベートーヴェンとトム・ウエイツ。ビゼーが生きていてこの映画の音をつけたらそうかもしれない音楽。ヘバネラが口笛で聞こえる。そのメロディーに、プレミンジャーの「カルメン」でオスカー・ハマージュがつけていた歌詞——

■映画「カルメン」決定版——  
ゴダール版カルメン映画は「カルメン」という名の女。ビゼーのオペラの原作のプロスベル・メリメが生み出した神話の女カルメンを現代のパリによりみがえらせる。神話に至る前、生きたカルメンを描くために、女であれ、男であれ、自然であれ、波であれ、すべてが、名前で固定される以前の生きた存在で脈うつ映画であるために。

輪をかけるようにフランスでポルノ版カルメンの完成まで伝えられるが、いったい何が起ったのか。背景は、これまで厳格に保護されてきたビゼーの音楽著作権の期間が過ぎにきた(保護期間中に映画化し、音楽出版社から訴えられて上映が延々できなかった例として、オットー・プレミンジャー監督のミュージカル映画「カルメン」が有名)からというが、それだけでもなさそう。生命を賭けて愛と自由に生き、ついに死に至るカルメンは、現代の神話の女性なのだ。

■カルメン・ブーム 現代の女性神話  
ヨーロッパで、時ならぬカルメン・ブームが起きている。  
カルロス・サウラがスペインでつくり、すでに日本でも公開されたフラメンコ版「カルメン」。ピーター・ブルックがジャン・クロード・カリエール台本で演出した演劇を、3種のキャストのままで、ブルックが3本の長篇映画にした演劇版「カルメン」の悲劇。フランチェスコ・ロージが、ビゼーのオペラを自然と実景で壮大に展開するオペラ版超大作「カルメン」。



ベートーヴェン



ジャン伯父さん●ゴダール



クレール●ミリアム



ジョゼフ●ボナフェ



カルメン●マルージュカ

身。映像はクタル、音はミュージーの、凄いコンビ。

83年ヴェネチア映画祭で、世界の一流監督だけで構成した画期的な審査委員会(委員長はベルナルド・ベルトルップ)、日本に懸念し、見た後で興奮してグランプリ金獅子賞の授賞を決定したという。  
キャスト・スタッフは、新人とヴェテランの混成だが、全員が新しいところに挑戦している意味では、新人ぞろいのエネルギーにみちみちている。  
カルメンのマルージュカ・デトメルスはオランダ出身の21才。ジョゼフのボナフェはフランス演劇界の新進。弦楽四重奏団の補欠のクレールは、「パッション」でデビューし、ゴダール次回作でいよいよ主演する話題の人、ミリアム・ルーセル。元映画監督ゴダール役で快演するゴダール自身。映像はクタル、音はミュージーの、凄いコンビ。

If I love you, it's the end of you...  
「私が愛したら、あなたは終りよ」がそのまま英語で、ジョゼフ(ドン・ホセ)に対してカルメンの口をつけている。ベートーヴェンの日記の言葉をそのままセリフとして呟くクレールや、ルイス・ブニュエルの名作の題名であり、またジャン・シロドゥワンの戯曲「ヘレクトル」の幕ぎれのセリフでもある言葉が映画の最後のセリフになるなど、ゴダール特有の引用は多いが、引用の註釈も解説も必要としない映像の魅力と、快い話はこのびが全篇を躍動している。  
■映画にはラヴ・ストーリーしかない  
私は映画にはラヴ・ストーリーしかないと思っています。もしそれが戦争映画なら、青年達が武器に対して持つ愛。ギャング映画なら、青年達が盗みに対して持つ愛。それこそ私は映画だと思えます。そして、それこそヌーヴ・ヴァークが新たに映画に持ち込んだものです。トリュフォー、リヴェット、私と他の二、三の監督が映画に存在しなくなったもの、或いは全く存在していなかったようなものを映画に持ち込んだのです。私達は女を愛したり、お金を愛したり、戦争を愛したり、何かを愛する前に、何よりも映画を愛したのでした。愛なしに映画は存在しません。今日、映画はテレビで放映されてうけがよく、むしろ最もうけるのが映画だという理由もそこにあります。テレビには愛がないからなのです。テレビにあるのは別もの、生活や企業に及ぼすのと同様の強大な力があるだけです。まったく力だけしかありません。映画は、どんな映画であろうとも、愛なしには存在しません。  
ジャン＝リュック・ゴダール



- 【スタッフ】
- 監督・脚色.....ジャン＝リュック・ゴダール
  - 脚本・脚色.....アンヌ＝マリー・ミエヴィル
  - 撮影監督.....ラウール・クタル
  - 撮影監督.....フランソワ・ミュージー
  - 録音.....
  - 音楽.....ベートーヴェン弦楽四重奏曲No.9、No.10、No.14、No.15、No.16
  - 演奏.....プラット弦楽四重奏団
  - 歌.....トム・ウエイツ(Ruby's Arms)
  - カメラマン.....ジャン・ガルスノ
  - 編集.....シュザンヌ・ラング＝ヴィラール
  - 製作代表.....アラン・サルド

- 【キャスト】
- カルメン.....マルージュカ・デトメルス
  - ジョゼフ.....ジャック・ボナフェ
  - クレール.....ミリアム・ルーセル
  - ボナフェ.....クリストフ・オゲン
  - 映画監督のジャン伯父さん.....ジャン＝リュック・ゴダール
  - 看護婦.....ヴァレリー・ドレヴィル
  - ジャムを食べる男.....ジャック・ヴィレル
  - 助けてと叫んで殺す女.....クリスチヌ・ピニエ
- 製作.....ドレミファンLA CO-PRODUCTION/  
SARA FILMS/JLG FILMS/ANTENNE 2/ 1983 JLG FILMS  
フランス映画/イーストマンカラー/スタンダード(1×1.33)/1時間25分/  
5巻・2,318m  
1983年ヴェネチア国際映画祭グランプリ金獅子賞・審査員賞(音と映像の技術に対する特別賞)受賞

1.月10日よりロードショー  
有楽町スバル座